

イエスの沈黙と発言

ルカ福音書22:63-71
(新改訳2017訳)

22:63 さて、イエスを監視していた者たちは、イエスをからかい、むちでたたいた。
 22:64 そして目隠しをして、「当ててみる、おまえを打ったのはだれだ」と聞いた。
 22:65 また、ほかにも多くの冒瀆の**ことば**をイエスに浴びせた。
 22:66 夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まり、イエスを彼らの**最高法院**に連れ出して、こう言った。
 22:67 「おまえがキリストなら、そうだと言え。」しかしイエスは言われた。「わたしが言っても、あなたがたは決して信じないでしょう。
 22:68 わたしが尋ねても、あなたがたは決して答えないでしょう。
 22:69 だが今から後、人の子は力ある神の右の座に着きます。」
 22:70 彼らはみな言った。「では、おまえは神の子なのか。」イエスは彼らに答えられた。「**あなたがたの言うとおりに、わたしはそれです。**」
 22:71 そこで彼らは「どうして、これ以上証言が必要だろうか。私たち自身が彼の口から聞いたのだ」と言った。

【祈りながら考えよう】

- (1) 大祭司たちはなぜイエスを殺そうとしたのですか。
- (2) 沈黙していた主イエスのお心はどんなでしたか。なぜ沈黙しておられたのですか。
- (3) 発言された時、イエスはご自分がどんなお方であると語られましたか。

【解説】

① 世から愚弄されるイエス

① イエスが受けた裁判

イエスが受けた裁判は、木曜日の夜から金曜日の朝にかけて、二種類、合計6回の裁判であった。二種類というのは、宗教的なものと国家権力による裁判である。宗教的な裁判は3回あり、時の大祭司カヤパの義父に当たる前大祭司アナスの所での審問(ヨハネ18:19-64)、大祭司カヤパの所での審問(マタイ26:57-68、マルコ14:53-65)、そして夜明けと共になされた最高法院(ユダヤ人議会)での裁判(ルカ22:66-71)の3回である。イエスは夜通し引き回されたことになる。

国家権力による裁判は、ローマ総督ピラトによる第1回の裁判(23:1-7)と、エルサレムに来ていたガリラヤ地方の国主ヘロデの所での審問(23:8-12)と、ピラトによる第2回目の裁判(23:13-25)である。これは、当時のイスラエルがローマ帝国の占領下にあって、死刑にするにはローマ総督の裁断を必要としたからである。ルカは前後6回の裁判のうち、宗教裁判の初めの2つの審問を除き、後の4回を記している。

② イエスを監視していた者たち

《さて、イエスを監視していた者たちは、イエスをからかい、むちでたたいた。そして目隠しをして、「当ててみる、おまえを打ったのはだれだ」と聞いた。また、ほかにも多くの冒瀆の**ことば**をイエスに浴びせた。》

イエスを監視していた者たち、大祭司カヤパの下で働いていた人たちは、イエスを罪人として捕らえてきたものだから、頭から罪人扱いして、愚弄(馬鹿にしてからかうこと)している。

彼らの中には、かつてイエスが宮で教えておられた時に、イエスの教を聞いていた者もあったであろう。またイエスが最後の都上りをなさった時、ろばの子に乗ってエルサレムにお入りになったが、その時に大歓呼をもってイエスを迎えた者もいたかもしれない。

しかし、彼らが期待したようなイエスではなかった。栄光のキリストではなく、今や惨めにも捕らわれ、縛られているイエスである。彼らの心は、もはやイエスの上にはなく、イエスを捕らえている大祭司、あるいは律法学者、パリサイ人、この世の特権的な者たちのもとに移っている。

彼らはありとあらゆる嘲りの言葉をもってイエスをからかった。イエスが、キリストだ、預言者だと言っていたということから、イエスに目隠しをして叩いた。「当ててみる、おまえを打ったのはだれだ」と言ってからかった。

③なぜ大祭司たちはイエスを殺そうとしたのか

なぜ大祭司たちが主イエスを目の仇にしていたのかと言うと、主イエスに対するねたみのせいであった。主イエスに対する人々の人気がいやが上にも上がり、それに反して、自分たちの権威が認められなくなっていくことへのいら立ちがあった。

それだけでなく、彼らに対する主イエスの容赦ない非難攻撃に彼らは耐えられなくなっていた。だから、彼らは何とかして主イエスを殺そうとたくらんでいた。

(2) 対抗しないイエスの心

①なぜ人に裁かれなければならないのか

この時のイエス様のお心はどうであったのか。歯を食いしばって、悔しさを抑えてあらゆる愚弄に耐えたのか。あるいはあきらめをもって、全く無関心のようにすべての愚弄を無視して耐えたのか。

主イエスのお心にあったのはそんなものではなかった。イエスの心には、どんな愚弄をする者に対しても、あるいはつばをかけ、蹴飛ばし、殴る者たちに対しても、少しの憎しみもわかかなかつたであろう。

イエスは何のために捕らえられ、何のために裁きを受け、何のために十字架にかかるのか、そのイエス様の心が分かっていたら、そのことはよく分かるはずである。

イエスは捕らえられなくてもいいのに捕らえられた。裁かれなくてもいいのに裁かれた。人間のありとあらゆる罪と汚れをその一身に受け取るために、イエスは捕らえられた。そうして十字架にかかるようにしている。

②十字架にかけられた主イエスの心

ルカ23章で学ぶが、イエスが十字架にかけられたその時に、最初に何と言われたか。恨みの一言でも言われたか。そうではない。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっているのです」(ルカ23:34)、彼らは無知のゆえに自分が何をしているのかが分かっているのだから、どうか赦してやって下さいと言っている。

自分をのしり、愚弄し、そして十字架にかけた者たちのために、その苦しい十字架の上から身をもって神にとりなしをしておられる。これが十字架にかけられた主イエスの心である。であればどうして打たれた所から、蹴られ、つばきをかけられる所から恨み返すことがあろう。その身に一切を受け取って、すべてを許しておられるこの時のイエスのお心を、深く思わされる。

(3) 議会(最高法院)に連れ出されたイエス

《夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まり、イエスを彼らの最高法院に連れ出して、こう言った》

①最高法院とは

夜が明けた(5時から6時)。イエスの受難の日の夜が明けた。全人類が、いっさいの罪から解放されるという、驚くべき出来事が起こった、その日の朝が来た。

最高法院とは、サンヘドリン、ユダヤの最高議会、最高裁判所である。ここに、その構成に3種類の人々が挙げられている。

《民の長老会、祭司長たちや律法学者たち》である。ユダヤ人を代表する長老は24名(アリマタヤのヨセフなど)。

神殿で働く祭司たちの班は24班に分かれており、各班に班長がいる。これが祭司長であり、24人いる。

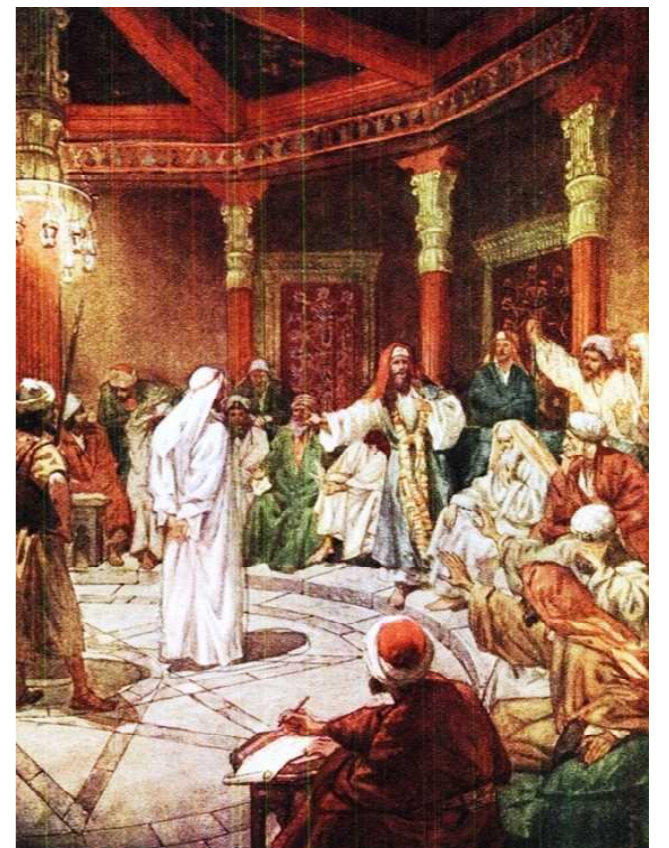
さらに律法学者が22名である。これは律法の専門家で、多くはパリサイ人である(ニコデモなど)。

そして大祭司が議長となる。従ってサンヘドリンは70名の議員と議長1名の71人をもって構成されている。

②緊急の議会だった

神殿の中の切石の間という大広間で、必要があれば毎日のようにこの議員たちが集まって議会を持つ。

全員集まらなくても、23名以上集まれば議会は成り立った。この場合は緊急の議会で、夜中から明け方にかけて召集され、イエスのことを裁いたわけである。



《イエスを彼らの最高法院に連れ出して、こう言った。「おまえがキリストなら、そうだと見え。」しかしイエスは言われた。「わたしが言っても、あなたがたは決して信じないでしょう。わたしが尋ねても、あなたがたは決して答えないでしょう。だが今から後、人の子は力ある神の右の座に着きます。》

ルカ福音書では、議会の裁判の様子の結論だけを簡単に記されている。マルコ福音書14章55節以下を読んで見る。

《さて、祭司長たちと最高法院全体は、イエスを死刑にするため、彼に不利な証言を得ようとしたが、何も見つからなかった。多くの者たちがイエスに不利な偽証をしたが、それらの証言が一致しなかったのである。

すると、何人かが立ち上がり、こう言って、イエスに不利な偽証をした。『わたしは人の手で造られたこの神殿を壊し、人の手で造られたのではない別の神殿を三日で建てる』とこの人が言うのを、私たちは聞きました。』

しかし、この点でも、証言は一致しなかった。

そこで、大祭司が立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか。この人たちがおまえに不利な証言をしているが、どういふことか。」しかし、イエスは黙ったまま、何もお答えにならなかった。大祭司は再びイエスに尋ねた。「おまえは、ほむべき方の子キリストなのか。》

(4) イエスに対する偽証

裁判に際して罪人を裁く場合に、証人が必要である。今でも、証拠固めということは大切なことで、証拠がよくそろわないと、これを罪人として断定することが出来ない。申命記17章6節に、人が裁かれる時には、必ず2、3人の証人の証言が合わなければ、これを罪に定めることは出来ないとある。それでまず証人を立てた。

しかし、この裁判は、裁判をして罪状を明らかにして、その罪を宣告をするという裁判ではなく、初めからイエスを殺そうという目的が先立っている。それに合わせる方向における裁判である。最初から罪状がはっきりしており、目的がはっきりとしている裁判である。

イエスには取り上げて言う罪があるわけではない。しかし、裁判の形式に従って証人を立てなければならないので、そこで証人を立てた。いろいろな事が言われたが、でっち上げであるから、証人の証言が合うわけがない。それを前もって準備に準備して、証人の証言がよく合うようにしておけばよかったが、この場合は緊急であった。

彼らの考えていたことは、祭りの時にはイエスを捕らえない、裁判はしない、この過越の祭りが終わってからやろうということが、彼らの目指していたことであった。

ところがイスカリオテのユダの裏切りから、手はず通りにいなくなると、変更して、緊急にイエスをあのゲッセマネの園で捕らえるということになった。そのためにこの裁判は予定よりも早くなった。だから証言者の証言を合わせるという準備ができていなかった。しかし証言をしなければならぬということで、次々と証人が出て偽証を立てた。しかし偽証であるから合うわけがない。

かつてはイエスの説教を一生懸命聞いた人々もいたであろう。イエスこそすばらしいキリストだ、預言者だともてはやした者もいたであろう。今、イエスは一人の罪人としてこの議会で立たされている。

この世の栄光を求める群衆はもはやイエスの味方ではなく、時の権力者の側に追従する者である。そしてあてもない、こうでもない、さまざまなイエスに対する偽証を立てる者となっていた。

(5) イエスの沈黙

その間、イエスは一言も答えなかった。何の弁明もしなかった。どんな偽証が立てられても、イエスは一言も弁明しなかった。イエスは静かにただ沈黙を守っておられた。歯を食いしばってではない、静かにである。

ここでもそのすべての偽りの言葉を、自分を不利に陥れ、殺そうとする言葉を、ひとつも庇わず、黙ってその身に受け取っておられるイエスの姿を見る。

イエスは黙っておられた。大祭司はたまりかねて、あたかも公平な裁判長であるかのごとく、イエスにその弁護をうながした。何かイエスに言わせてその言葉じりをとらえ、罪に陥れるしか、もう手はないと思ったから、何かイエスに言わせようと思った。

沈黙にも二通りある。今の法律では黙秘権というのが許されている。裁判において黙秘権を使う時は、自分に不利なことを言われようとする時に使う。しかし、自分に有利だと思う時、弁護することはいくらでも許されている。

だから自分に都合の悪い時はどこまでも黙っている。しかし、自分に有利に弁護できる時にはどどん言い立てる。どこまでも自分本位である。しかしイエスの黙秘、沈黙は決して自分を守るためではない。もし自分を守るためなら、つまらない不利な証言に対してははっきり答えていかれたであろう。

しかし、何も言われなかった。それで大祭司が、何か答えたらいいではないか、不利な証言をみんなが申し立てているが、いったいどうなんだ、何か弁護したらどうだと言ったわけである。しかし、イエスは黙っていて、何もお答えにならなかった。

(6) イエスの発言

《大祭司は再びイエスに尋ねた。「おまえは、ほむべき方の子キリストなのか。》(マルコ14:61)

ルカ福音書の方は、《おまえがキリストなら、そうだと見え》とある。その問いに対してイエスははじめて口を開かれた。ここで発言すれば、それが死罪になることはよくわかっている。人間だったらこういう所で黙秘権を使う。しかし、イエスは逆である。そういう時に、はじめて発言された。

《わたしが言っても、あなたがたは決して信じないでしょう。わたしが尋ねても、あなたがたは決して答えないでしょう》
わたしがキリストだと言っても、あなたがたは、ああそうですかと信じることは絶対にしない。また、わたしがキリストであることを信じるかと、こちらから尋ねても、決してあなたがたは答えない、とされている。

《だが今から後、人の子は力ある神の右の座に着きます》(69節)

この言葉をもってイエスは、あなたはキリストであるか、はっきり言ってもらいたいということの答えとなさった。マルコ福音書14章62節によれば、なおそこに言葉が加わっている。

《わたしが、それです。あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります》

《力ある神の右の座に着きます》、すなわち十字架にかかって死ぬが、三日目に復活して、そして昇天し、現在のキリストとして、今も生きるキリストとして、力ある神の右に着くということである。さらに、そこからやがてこの世の終末において、再臨のキリストとして天の雲に乗って来る、それをみんな見るであろうということである。

この主イエスの言葉に、十字架、復活、そして昇天、再臨、これが含まれている。キリストの内容が具体的に答えられている。キリストは単なる世の救い主なんてものではない。人間を罪の根底から完全に救い出し、自らは復活して、そうして神の右に着き、そして再びこの世に来られる。これがキリストである。

神の右に座するまでは終わっている。キリストがそこから天の雲に乗って再び来るといふ、この再臨のキリストについては未来のこと。キリストはそのようなキリストである。現在、生けるキリストとして神の右に着いておられる。

やがてそこから再び来られて、これに背く世を裁き、救いを受けていた者、信じていた者をご自分のもとに引き上げ、新しい神の国を来たらせ、そして私たちの救いを全うして下さる、これがキリストである。

私たちはそのようなキリストを信じているか。イエスがこのユダヤ人議会において裁かれて、死罪と定められたのは、ほかでもない、イエスがこのようなキリストであると発言されたことにある。

(7) イエスは神か、罪人か

マルコ福音書を見ると、14章63-64節、

《すると、大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。「なぜこれ以上、証人が必要か。あなたがたは、神を冒瀆することばを聞いたのだ。どう考えるか。」すると彼らは全員で、イエスは死に値すると決めた。》とある。イエスの発言は、自らの死を決定する発言となった。

ユダヤ人の律法には、人間でありながら自分を神と等しくする者は、死罪にあたり定められていた。

イエスが単なる人であれば、イエスがここで死罪に定められたのは、律法に定めるところであり、この裁判は正しい裁判である。

しかし、イエスが単なる人ではなく、力ある神の右に着き、そこからこの世界を裁くために再び来られる神の子キリスト、すなわち、神と等しいお方であるなら、これを裁いて死罪にしたほうが、徹底的に神に逆らう、恐るべき罪人である。



自分の衣を引き裂く大祭司

(8) イエスは再臨される神の御子

イエスはご自分を神の子であると発言し、それゆえに十字架にかけられた。しかし神の子の証拠として、三日目によみがえられた。

復活によって、イエスを罪人として十字架にかけて殺したという裁判が、明らかに間違いであることがはっきりした。イエスは言われた通り復活し、昇天された。

将来において、イエスは言われた通りに再び来られる。それがキリストである。それ以外の者はキリストではない。イエス・キリストを信じるとは、そのように信じることである。ただイエスの教えを学ぼう、すばらしい教えだからその教えを受けようという、そんなのは信仰ではない。